

# 翻訳 ポール・クロードル著『炎の街を横切って』

山 崎 順 子

## 前書き

フランスの劇作家ポール・クロードルは、1921年（大正10年）9月2日、マルセイユからアンドレ・ルボン号に乗り込み、駐日フランス大使として日本に向かう。

青年時代から日本に赴任することを望んでいたクロードルは、世界各国を歴任した後、53歳にして漸く念願を果たすこととなる。

外交官として、詩人として、日本中を巡り歩き、他の多くの外国人たちと異なる視点から日本を探究し続けた。その成果たる『朝日の中の黒い鳥』は、能・歌舞伎・文楽など伝統文化から国土・自然まで、深い洞察と卓抜な「解釈」に満ちたエッセイ集である。

関東大震災の体験記『炎の街を横切って』は、クロードルの作品全体の中でも珍しいルポルタージュ的作品と言えよう。しかしながら、外交官として本国フランス外務省宛に被害状況を報告した電報とはかなり異なり、構成も表現も文学作品としての形をなしている。

クロードルの目に映る日本の国土は、絶えず活動し生命力に溢れる場、破壊的な力に満ちた不可思議な土地だ。海に浮かぶ琴の如き長い島の国、能の舞台と同じく空無を孕み、超自然の力を秘めた国、つまり自然そのものが「ひとつの神殿」をなす宗教的な国であり、地震はその端的な表れなのである。

大震災により家族も多大の被害を蒙り、彼自身、代表作の『繻子の靴』の原稿の多くを失って書き直すなど、様々の不自由を強いられたのであるが、クロードルは決して地震を負のものと捉えてはいない。日本人が「閉ざされた小さな庭」で安穩にくらす面を嫌悪し、またカトリック信者としてアジアの宗教全般に対する反撥を隠さぬクロードルにとって、地震は閉塞を打ち破る地底からの原初の叫びと言える。地下深くから伝わる自然・超自然の働きかけによって日本人は生命を吹き込まれ、自らの演劇の舞台を与えられるのである。

## 翻訳

横浜は破壊された。桜木町駅の程近く、光沢ある陶器の塊となって辛うじて立っている家一軒を除けば、神奈川海辺から丘陵にかけて、あらゆるものが無に帰した。絹の都は滅びたのだ。白や黄の艶やかな絹糸の枷が溢れていた中で、残ったものとは言えば、泥水に漬かった布包み、それにクーリーが腰に結んでいた編み紐ばかり。五十年この方、外国人が生み出した成果は全て——と言うのも、横浜の町を築き国内随一の港に育てたのは外国人なのだから——ものの数時間で潰えた。フランス人が、自分たちの蒙った被害も後回しにして私に訴えた第一声、それは、『絹が今後神戸に移ってしまう』という不安であった。

外国人居住地全域、海岸沿いの建物は全戸が最初の揺れで倒壊した。この中には、宿泊客で満員のホテル二軒も含まれている。フランス領事館は文字通り消え失せ、私の友人デシャルダン是不運なことに、その下敷きとなった。荷車の上に横たえられた彼の遺体は、すでに顔が黒ずんで膨れあがり、両足は振れていた。アンドレ・ルボン号のフランス人乗組員達が遺体に掛けた布は剥ぎ取られ、履いていた靴も略奪されていた。悪臭漂う熱気の中、黒焦げになった倉庫が、古代バール神の呪われた竈さながら、あちらこちらに残骸を晒している。ふたつの埠頭が崩壊し、海底そのものも変化したと言う。斯くしてヨーロッパ人とアメリカ人の作品は灰燼に帰した。フランス人の手になる二大作品たる聖モール女子修道院、並びに聖ヨゼフ学院は跡形も無い。十人の修道女が礼拝堂の瓦礫に埋もれて命を落とした。右手に見える巨大な黒煙の柱は横須賀の大きな軍港の火災であり、左手、赤みがかった光に照らし出される霞んだ山は、炎上する東京の姿だ。

東京では市街地の四分の三に相当する四十万戸の家が倒壊して、百五十万人が住み家を失い、これまでに七万人の遺体が収容された。日本の要たる首都東京は、パリよりも遥かに、富も力も、娯楽も科学も、あらゆるものが一極集中して来た。古い歴史を持つ東京の下町——徳川家が砦を築く以前から、江戸の小さな家が建つのを見守ってきた隅田川に沿って広がる伝説的な葦の国。戦勝の犠牲者たちを祀る青銅の門の立つ九段の高台や、皇居の周りにめぐらされた巨大な石垣から海岸線に至る由緒ある地帯は、今や、トタン板が散らばる赤茶けた灰の砂漠と化した。視線を遮る物としては、大きなアメリカのビルディングの塊、そして中心街の銀座に並ぶ痛ましい二列の建物に過ぎず、その銀座通

りもあたかも巨大な刑場の如き有様。人間が生み出した作品、鉄や煉瓦ながらも人間の魂を持つ生き物たちは、劫火の欲しいままに責め苛まれた。

縮み織や金欄綴子を商う店々。室内装飾店の並ぶ通り。宝の山の「仲通り」。日本橋。レストランや洒落た喫茶店の多い新橋。学生街の神田。帝国大学。吉原や観音の寺で知られる庶民の憩いの地、浅草。さらに隅田川の対岸には、大きな国技館のある両国。そして、見渡す限り広がる海拔ゼロメートル地帯では、諦めきった貧しい階層の人々が稲作の水田で、あるいは化学薬品のガスが立ちこめる工場で生活していた。賤民の小屋。はんこ屋。パイプ掃除屋の車。その傍に並ぶ大きな劇場。金の蒔き絵の漆器や豪華な織物を集めた大倉美術館。光琳と雪舟の絵を、日替りで床の間に飾っていた高級料亭、これら全てが炎によって舐め尽された。アラリック王の略奪遂行にも比される燔祭の生け贄として、古い日本は一撃の下に消滅し、未来に席を譲ることとなった。

街中では、電柱と電線が絡み合い、もはや路面電車は屑鉄の山。吹き荒れる炎に池の水さえ煮えたぎった。ベルギー人看護婦パルマンチェ嬢は膝にチフス患者を抱いたまま、煙の立ちこめる水浸しの地下室で一夜を明かした。浅草の沼地では二千人に上る女性が生きながらじわじわと焼かれた。しかしながら最悪の陥穽に陥ったのは本所の町で、首都でも一番悲惨な地域となった。ここは陸軍被服廠跡の広大な空地ゆえ、三万人が避難して来ていたが四方八方から火の手に囲まれ全員が非業の死を遂げた。遺体の周囲に黒く澱んだ水は、人間の脂の層で覆われていたという。さらに、コンクリートの小さな交番には、五つの遺体がうずくまっていた。職務を放棄するよりもその場で焼き尽くされることを選んだ警官たちだ。

九月一日は、昔の中国の暦では二百十日にあたる。日本人は、この日を毎年不安と共に迎える。と言うのも、稲の収穫の成否を決するのがこの日であり、しかも大きな台風が通過するのも大方この日なのだから。日本は地球上のどこよりも危険な国で、津波、台風、火山の噴火、地震、火災、大洪水など、常に何らかの災害に晒され、絶えずその予兆が発せられている。大地に安定性というものが無いのだ。石と砂、溶岩と火山灰など分離しやすい物質が不安定に堆積し柔らかい沖積土の層がこれに重なって出来ている日本の国土は、亜熱帯植物の強靱な根が張り巡らされ、全体を繋ぎ止めている。

東京着任後すぐさま、われわれは大地の震え、足元の地鳴り、絶え間ないざわめきの歓迎を受けた。われわれは、草花の陰でまどろむ一眼の巨人キュクロ



ベスの客としてもてなされたというわけである。日本人は、己れを取り巻く剣呑な神秘を常時意識している。自分の国に熱烈な愛情を抱いているが、信頼してはいない。絶えざる警戒が必要だ。世の尊敬を集めながら不幸にして、時折てんかん発作をおこす母親を持つ息子のようなものである。揺れ動く大地の上で日本人が見出した唯一の安全策、それは自らを出来るだけ小さく、出来るだけ軽くすること、厚みも重さも無く、殆ど場所をとらず、虫や蟻のようになることだ。日本人の家は紙で仕切られた一つの箱であり、財宝も掌に入れたり袖の中に隠せる類のものだ。日本人は床に座る。穴の中で炊事し、それもわずかな穀物と湯水さえあればよい。家は全方位、外に向かって開かれている。ごく一般的な引越ししに立合った経験では、最初に運び出されるのは畳（莫産）であり障子（紙を貼った枠）である。これらの他に柱が数本、トタン板が数枚あれば、日本人はどこにでも身を置くことが出来、睡蓮の葉陰の蛙と同じく、心地よく安全な暮らしを享受出来てしまう\*。

\* 友人が私に語った話によれば、道に迷った旅人がある日、年老いた夫婦に一夜の宿を請うた。屋根の無い家に何の不満もなく暮らす夫婦に、旅人は風変わりな建物の謂れを尋ねた。屋根の半分を取り払ったのは、老婆が満月の金色の輝きを堪能できなかったからである。残りの半分は、老人が銀よりもまばゆい夏の驟雨をより一層楽しむためであった。

日本人は、家屋や家財を周囲に合せて来たのと同じく、自分の魂をも周囲に合せて来た。今回の地震の夜、私は東京・横浜間を長時間歩き続け、また、命拾いした人々の巨大な露営地で数日を過ごしたが、その間不平ひとつ耳にすることが無かった。あたかも、隣室で両親が発狂して錯乱する良家の子女の如き、悲しい諦念を持つ人々なのだ。上野の高台を登って行く避難者たちの群れの中には、迫って来る炎の姿をわざわざ立ち止まって眺めるグループもあったと言うし、「きれいだ、素晴らしい！」という賞賛の嘆声さえ聞かれたそう。日本人のストイシズムは、根本的に儒教の礼の一形態であろう。謂集するアジア諸民族は、「動きにおける慎重さ」を身につけざるをえない。急に動いたり無分別をして、隣人を煩わせることは許されない。小舟に乗り合わせた者は皆、静かにしていなければならない。雑踏の中で隣の人に足を踏まれたなら、一時間でも文句を言わずにいることだろう。私の同僚は、地震の夜、妻とひとり息子を探しに行く海軍士官と横須賀・鎌倉間を同道した。一旦ホテルに到着して間もなく、海軍士官は平静そのものの清々しい表情で

戻ってきた。同僚が妻子の安否を尋ねると、「ああ！二人とも亡くなりましたよ」と答えて、普通的话题に戻った。暫くして漸く、士官はこう言ったという。「私が的外れな答えをしたらお許しください、少々神経が昂ぶってしまって（少し興奮していますので）。廃墟の下敷きになった犠牲者たちの声も、「助けてくれ。ここだ！」と押しつけがましい要求でなく、「どうぞ、どうぞ（お願い致します）」という慎み深い哀願であった。フランスのコルマル号の艦長が旅順駐荷の日本人高官から大震災について聞いたのは、艦長の設けた昼食会の席上、実に和やかに談笑のさなか最中であった。その三日後にコルマル号は横浜に入港したが、到着の十八時間前、沖合の海にも悲惨な大燔祭の臭いはすでに漂って来ていた。

——深い東京湾は、日本の脇腹に一種の裂け目を作っている。湾内には、陸から崩れ落ちた土砂の堆積層が海底の深い陥没地の上に張り出し、太平洋の海流と台風と絶えず拮据たれつつ、何世紀にも亘ってバランスを求めて来た。だが、いかに激しい大変動が生じても、まだ安定は得られずにいる\*。

\* 今回の大震災以来、相模湾では深さ二百メートル、長さ十八キロメートル、幅四メートルの深い亀裂が生じたことが確認された。

一八五五年、徳川時代末期の安政大地震は、唯一今回の大地震に匹敵するものだが、恐ろしさからすれば、九月一日の震災が遥かに深刻であった。来日して以来二年間、我々は前兆の震動を強く感じて来た。一九二一年十二月八日と一九二二年四月二十日、激しい揺れがあり、三十年間、東京のフランス大使館が置かれて来た虫食いのバラックにひびが入った。フランス行政府と議会在節約精神から、決して再建を許可しなかった代物である。だが私は、大使館事務局用に新しい建物を建て、本来の公邸をしっかりとした支柱で取り囲むよう、認可を取りつけておいたのだ。この用心がなければ、我々はどうなっていたことだろう。

九月一日正午（この時刻を知らずにいることは不可能であった。なぜなら、まさにこの時間、正午を告げる号砲係が大使館を見下ろす皇居の稜堡上で、定められた号砲を轟かせたのだから。混乱した事態にうろたえなかった彼ならば、最後の審判のラッパにも動揺することはない）、大地が足元で揺れ始めた。ジンシ（地震のこと。クロードの誤記）の怖さは、大地震も微震も始まり方は変わらない点である。慣れた人でも、大災害と小さな揺れを最初は区別出来ず、席を立つのをためらってしまう。だが、今回は衝撃が直ちに激震と

なって襲いかかり、私はガラス戸を駆け抜けて、外へ飛び出した。すべてが震動していた。自分の周りで大地が突如、怪物じみたひとつの生命を吹き込まれたかのように動くのを見るのは名状しがたい恐怖である。前にも言ったが、それはあたかも常に全幅の信頼を寄せていた確かな人物が、突然、自分自身のためにだけ行動し始め、我々のことなど眼中になく、ただ錯乱と苦悶の痙攣に身を振るのを目の当りにするかのようだ。古い大使館は係留された船のように支柱の間で暴れもがき、瓦や漆喰や煉瓦があちこちから落下してきた。それでも何とか持ちこたえた。この古い建物の頑張りを私は称えずにはいられない。足元で響く地鳴りは、木箱に小石を入れて揺すぶる時のけたたましい音としか喻えようがない。衝撃、またしても恐るべき衝撃、次いで漸次回復する安定状態。だが、大地は鈍く震動し続け、時を問わず新たな発作が再燃する。

奉公人たち。アジア風の住み家を取り囲む大勢の使用人たち。各人がみな、沢山の子供たちを連れ、私の邸の中庭を埋めつくす。私の運転手は、前日に出産したばかりの妻を背負っている。昔のサムライ（侍）で、いつの頃からか大使館の警備員を務めるベテという老人は、中風の麻痺にもめげず歩き始めたが、墓地を忘れた幽霊のようによろめいている。至る所でフトン（布団）や蓐蓐、衣類が運び出され、野営キャンプが組織される。私はと言えば、一種の治外法権で常に守られていると信じ込む年老いた中国人居住者にも劣らぬ呑気さで、なかなか危機感を持てない。おもちゃ箱をひっくり返したような家の中に入っても、私は、机の上に散乱している自分の一年間の労作たる原稿を安全な場所に移すという考えすら思い浮かばなかった。

しかしながら、火災が起きてしまった。四方八方に煙が立ち、水路は切断され、消火ポンプも瓦礫に潰され、風が嵐のように吹き荒れた。この時、台風が首都を通過した。私の住む神田の界限（東京の学生街）は炎上し、ある女子校は倒壊して無数の犠牲者を出した。聖パウロ女子修道院と連絡を取りたくとも、近寄ることが出来ない。これから視察する暁星学園の学舎は、五時の時点では災害を免れているようだ。大使館の南側一帯は建物のない空白状態となっており、炎が風に追いやられている。北側は巨大な宮城が我々を守っている。大使館の建物は、炎上している市街とは殆ど接点が無い。細長い家並の列がわずかに残って連なっているが、それも樹木や庭園で分断され、類焼の危険は無い。少なくとも私はそう確信した\*。

\* 夜に風向きが変わり、市街地の奥の炎が再び戻って来た。大使館の屋根



は防火装置が無かったため、火が燃え移った。

だが、私の同邦たち、横浜在住のフランス人はどうしているだろうか？彼ら三百人は、日本におけるフランスの利権のすべてを掌握する立場の人達だ。また、領事を務める旧友デジャルダンはどうしていることか。彼の邸は美しいが華奢で、いかにも危うい。横浜は、東京よりも遥かに地震に苦しみ続けて来た。横浜から遠からぬ逗子の海岸に滞在している私の娘は無事でいるだろうか。座して待つしかない状態は耐え難いものだ。空軍武官テチュ司令官の運転する小さな車で私は出発する。

——夜九時、私は見てとった。

比較的被害の少ない郊外を二時間かけて横切るうちに、我々は眼前に奇妙な雲が夕日の中で、ぐんぐんと大きくなっていくのを見た。夏の晴れた日々の積雲に似ているが密度が濃く、強風にも吹き散らされることなく、ゆっくり移動して行く。同じような雲の山が、白く金色に輝いて我々の背後にも立ち昇る。

橋が崩落していたため、我々は車を捨て、夜の闇を徒歩で進み続けた。やがて一条の光が闇を照らし、次第に明かりが広がる。そして突然、我々の前に出現するのは、燃え上がる横浜のパノラマだ。

まず、白熱の山脈<sup>やまなみ</sup>の如き光景が目に入る。石炭置場が燃えているのだ。その奥にも、殆ど同じ形をした燠の半円丘が連なり、時折明るい炎が燃え上がって燠る燠を照らし出す。瞬間間に、何キロ四方とも知れぬあたり一面、火の海となる。終息する台風が最後の風をこの溶鉱炉に激しく吹きつけ、燃えるように熱い水蒸気が漂っている。時折爆音が鳴り響き、巨大な火柱が空に立ち昇る。ガスタンクが爆発し、化学薬品倉庫に引火したのである\*。

\* 後になって知ったのであるが、これらの火柱は極度の高温によって引き起こされた一種の局地的サイクロンの結果と言う。通常では溶接用吹管を用いて漸く可能となる金属の溶融が生じたケースであった。

群集の無数の話し声にも似て、じりじりと音を立てて燃え続ける炎。暖炉の中にぎっしり詰まった薪や柴に火を点けた時の馴染み深い音。恐るべき劫火は喜び勇み、あらゆる手管を駆使して大地を舐め尽した。その夜、火の手を逃れ得たものは皆無であった。

巨大な街が私の眼前で燃え上がる！ 私はすべてを目撃した。

我々は線路沿いの土手の斜面で、草いきれに包まれて休んだ。私の身体の下で大地はひそやかに振動し続ける。時々強い揺れが来ると、我々を取り囲む長

い車輛の列が線路の間で揺れ動き、轟音を響かせる。左手遠方には赤みを帯びた巨大な東京の街が望まれ、右手には最後の審判の如く、私の頭上を火の粉と火花の川が絶えず流れていく。だが、それでもなお銀色の列島からほどなく月は上るのだろう。極めて細い遅めの月である。やがて、空にオリオン座が姿を現わす。旅人の友であるこの大きな星座は、両半球を代わる代わる訪れる空の巡礼者でもある。月が運行を開始した。海の上に差しのべられた手が、この上無い慰めの光をふり注いでいた。

折れ曲った鉄道線路や隙間だらけの橋を伝い歩いて横浜に入ったのは明け方のこと。ふたつの駅は既に資材の山の如き惨状であった。眼前の惨憺たる光景を貫いて走る街路には、屍と残骸が散乱している。世界が初めて終焉を迎えたこの時、嘗てない残虐な征服者がこの道を踏み拉いたのだ。私は一人の同僚に出合ったがすぐには彼と見分けることが出来なかった。もはや泥の塊にも紛う姿となり、炎熱で充血した双眸だけが赤く浮き出していた。荒れ狂う泥流のうねる公園で、彼は一夜を明かしたのである。本所の町に比べれば死神は未だしも情けを忘れなかったのであろうか、死を免れた五万の避難者の群れに彼は居た。累々たる屍は衣服もなく皮膚も剥がれ、木の蔓のように振れた赤と黒の物体だ。郵便局の前には荷を積みかけたトラックがあり、運転手がドアの前に倒れ伏し、助手は地面に横倒しになっている。

我々はヨーロッパ人の住む界隈を横切った。崩れ落ちた煉瓦やくすぶり続ける梁の間から、切妻が毀たれてなおもそびえ立つ。多くの銀行や商店は、その中核たる金庫が石の土台の上に残るのみ、あたかも腫瘍を摘出した器官を彷彿させている。焼け焦げた物体や人間の遺体から悪臭が立ち昇る。我々は海岸に到着した。壊れた防波堤の石塊につかまり重なり合った舟を伝って、城砦の如きアンドレ・ルボン号まで辿り着くのは大仕事だ。とりわけ、戦争で片腕が不自由になった私の同僚にとっては大変な苦役であったろう。漸く船上でクザン船長と握手できた時は感極まった。彼こそ、二年前に私を日本まで連れて来てくれた人物である。パリ生まれの船長は、上品で洒脱、海の上でもサロンでも変わることなく悠然としており、彼にとっては、遅しささえも洗練のひとつの形でしかない。船長は前日の様子を私に伝えてくれた。アメリカへ向けて出発するエンプレス号の乗客を見送るため、埠頭に多数の人々が集まっていた。その時突如激震が走って、セメントと鉄の巨大なりボン状装飾がかんな屑のように折れ曲り、荒れ狂う海に突き落された群集は皆、波に揉み拉かれてもがいて



いた。と同時に岸では建物の列がなぎ倒され塵と煙の巨大な雲が立ち昇り、次第にあたり一帯を覆い尽くした。次いで火災が起これ一昼夜燃え続けることとなる。

さて、件のアンドレ・ルボン号は動きを封じられていた。装備もウィンチも故障し、重要な部品類は陸上に保管されている。さらに信じ難いことに、郵船会社がモーター付きランチを使おうとしたところ許可が下りなかったのだ。曲がりなりにも救出活動が組織され、動き出したのは、素人ながら熱意ある職員達の御蔭であった。彼らは船脚の重い小舟を慣れぬ手付きでどうにか操って働いた。輝けるアンドレ・ルボン号に助けを求める者は、外国人も中国人も日本人も誰かれを問わず迎え入れられた。船医がイギリス船ドラゴン号に乗船し、集められた負傷者たちの手術を夜通し行なった。

ありのままの真実に敬意を表して記すのだが、九月一日と二日の主たる救出作業は、このフランス船ならびにエンプレス号（オーストラリア船）によって為されたものである。

——私は領事館の前で上陸した。以前、フランクフルトに駐箭した時に副領事を勤めたデジャルダンの遺体が、倒壊した領事館の傍らに安置されていた。フランス人や他の外国人が三々五々集まり、この種の大惨事につきものの恐ろしい光景を目の当りにした。妻の姿を捜し求める夫。目の前で娘が生きながら焼かれるのを見たばかりの父親。両足に火傷したひとりぼっちの二歳の幼児。親切な日本女性が、小さなおにぎりを与え、この子を抱きしめていた。あるフランス人は、墓場と化したこの地帯に妻の遺骸を見つけたと思いこんでいたので、我々がアンドレ・ルボン号に無事避難させたことを知らせた。マリア会の修道士たち、チャベル倒壊により十名の犠牲者を出した聖モール修道院の修道女たちも集まって来た。そして最後に突然私の前に現れたのは、あるアメリカ人外交官。髪をふり乱し泣き叫ぶ妻共々、きらびやかな服も泥にまみれ、足にはぼろ切れが纏いつき、生きた人間というよりは経帷子に包まれた死者の如き有様であった。私は彼らの姿を終生忘れないであろう。子供を腕に抱いて五階から飛び降りたのに、空中を漂うようで怪我ひとつしなかったと語る男も居た。彼は火災で真黒に焼けた一個の梨を貴重な宝物のように、私にそっと差し出して見せた。また或るイタリア人は地震から身を護ろうと突進して、走行する自動車の車輪の下敷きになったが、かすり傷で済んだと言う。

さて、不慣れなオール捌きで湾内を動き始めた小舟は皆、破滅とみじめさと

苦しみという積荷を運んでいる。午後二時ごろ、新たな恐ろしい危険が持ち上がった。朝から港の処々で停泊中のタンカーに火の手が迫っていたが、この時点で停泊地全体に炎が広がり、どろどろの緑がかった層で海面が覆い尽くされてしまった。航行不能のアンドレ・ルボン号に向かって火の川が息詰まる黒煙を吹き上げながら迫って行く。当初は、海からの風と漂流物の堆積が火の勢いを食い止めていたが、堆積物の山が崩れ風向きも変わり、炎が接近する。すんでのところでアンドレ・ルボン号は煙の中に姿を消すところであった。我々は、火の手がいつ上るかと思悟を決め、固唾を呑んで見守った。しかしながら、奇蹟が起きたのだ。麻痺状態にあった船が動き始め、炎の届かぬ所まで首尾よく遠去かった。船長は成功裡に船を救い、風も船を押すのに一役買った。

ラフィンという一人の勇敢なアメリカ人が自分の小舟に乗り、船から投げられたロープを受け取ってブイに固定した。これを支点として船を曳航し、苦心の末、五十メートルという距離をものにした。この五十メートルのお蔭で、二千人の避難者を乗せた客船は、迫り来る炎と闇の障壁から、辛くも逃れることが出来た。感動的で素晴らしい光景であった！私は同胞たちを誇りに思う。

——再び前進だ！おぞましい残骸に溢れ油でべとべとした小運河に沿って進む。生ける屍の如き人々の露营地を過ぎる。死者の魂の運び人カロンに支払うオボール銅貨さえもたない亡霊たちが、銅貨を求めて灰塵を漂った形跡が窺われる廃墟も通った。さらに一本の黒焦げの大梁となり果てた橋を渡って進んで行く。

するとふいに、厭わしい光景が姿を消した。微笑みかけるような緑の田園が広がり、生い茂る林に囲まれる谷間には農作物がたわわに実っている。都市を破壊した地震もこの稲の海原には、ほとんど震動を走らせることがなかったのだ。二百十日は過ぎ、収穫物は救われた。大きな葵の花が藁葺きの農家の垣根を華やかに彩る。藍の花びらは土手の草むらで空色に輝き、重みのある堅い柿の実、すでに枝をたわませている。ここでは大災害の爪跡も、むしろ微笑みを誘うような小さな異変として見出される。例えば、頭巾の類を作る製造所が難破船のように倒れたが、その中から黄褐色の燃え立つように派手な作業服姿の人々が出て来るのは心楽しい風景だ。そこここで、苔むす藁葺き屋根がいちはつの花を載せたまま地面に崩れ落ちているが、それとて含まれた空気の層の働きで、なだらかに落下したため、誰にも危害を加えることはなかった。屋根が落ちるのも習いなのだろう。立て直すには何本か大きな梁があれば事足りて

しまう。漁船に座礁が付き物であるように、こうした出来事は日本の農家の暮らしには当たり前なのだ。絶えず動く危険なこの大地に必要なのは、家よりも小舟である。

そして間もなく、私は、すんでのところで津波に奪い取られるところであった娘をしっかりと抱きしめることが出来た。海はなんと美しいことか！食事がなんと美味しいことか！空の遥か高みには、あの孤高にして静謐な富士の霊峰がその冠を頂いている様子が望まれる。

——激しく揺れ動いた心が少しずつ休息前の静止状態に戻っていく時、我々の中で堆積されて来た様々な感覚や心象の層がお互い同士、奇妙な交換を行ない始め、ゆっくりと混ざり合う。次いで、またばらばらに分かれ、沈殿していく。そして、内省的な震える精神の鏡面には、外界の様々な印象が実に生き生きと刻印される。それはちょうど、池の表面で小鳥や木の葉の影が水底から立ち昇る藻や魚たちと混じり合うのに似ている。我々は、内的精神と外界を分けるこの表面を普段は意識していない。だが、友人のポーランド公使邸に集まった夜、我々は皆、自分たちが内部と外界の境目に存在している不思議な状態を認知していた。

素敵な夏の夜であった。公使邸は亀裂を生じたため、庭にテントを張って、その下にテーブルを設えた。大災害の記憶が心の中を行きつ戻りつし、誰もが黙しがちであった。恐ろしい記憶の断片が時折浮かび上がり、突き刺さる……。私がこの邸に辿り着くまでの道々、目にして来たあの東京の様子が思い浮かぶ。灰に覆われた廃墟。だがそこでは既に、慎ましくとも熱気に満ちた建設者たちが活動を始めている。各々が鶴嘴や籠、オニギリ、板の切れはし、小さな布切れ、トタン板を持ち寄り、至る所に蚕の繭のように壊れやすい小さなバラックが建てられる。通りには車が長い列をなして走行している。大型車を見れば重量級の軍用トラック、大梁から小荷物まで積みこんだ貨物車、運命の神々を乗せた伝説上の舟の現代版とでも言おうか救助隊が誇らし気に乗り組んでいる車など。そして小型車とは見るとオート三輪車、パイソンの一種である和牛に引かれた二輪車等々……。

この庭園はなんと爽やかなことだろう！ 何という静けさ！ 息詰まる一日を過ごした後の何と清々しいことか！……すると突然、足元に大地の奥から深い揺れが来た。まるで肉体を通じて我々の魂まで伝わって来る放電电流のようだ。我々は顔を見合わせる。テーブルの上のランプも揺れる。否、すべ



ては静止状態に復した。ある若い女性が透明な翅<sup>はね</sup>を持った大きな蝉を手にとって、小声で言う。『ご覧なさい。この蝉は私の手の中で鳴きはしません。もう歌うことはないのです。夏は終わりました。一週間もすればこの蝉は死んでしまいます。』

——我々として蝉と同じこと。この不安定な崖の上で束の間、集うている我々も、死を免れることはなかった。我々の奥底に存在し続ける或るもの、それは死とのひそやかな共犯関係を保っているのだ。

1923年 9 月